オーディオにおいてスピーカがいかに重要か．もっとも遅れているのが，昔も今もスピーカなのである．

しかしそれでも思う．やはりもはや池田氏や高城氏の時代ではないのだ，と．つまり，同じことをやっても無駄だということだ．（中略）

実際，1950年代，60年代は電気音響はHi-Fi，ステレオの全盛期であり，いまのオーディオ・マニアや評論家のかなりがここからオーディオに入っている．その結果として，彼らは，自分たちのHi-Fiやステレオだけがホンモノであって，それ以外のオーディオはニセモノである，という価値観から抜けられない．

私の考え方はこうだ．一般に，デジタルは音が悪い，デジタルだから音が悪いといわれる．しかし，私は，Hi-Fiだから音が悪い，Hi-Fiは音が悪い，と思っている．Hi-Fiステレオは，聴感や使いこなしが必要である．それはローテクだからである．現在のテクノロジーのレベルでは，聴感や使いこなしなんてほとんど必要ないものがつくれるのだ．不思議なのは，Hi-FiもMPEGもどちらも心理的な再生であって，兄弟みたいなものだ，ということだ．

話を元に戻すのだが「高城氏や池田氏はアマチュアとして尊敬に値するが，さすがにもう時代遅れだ」というのはこういうことだ．Hi-Fiやステレオ，あるいは放送は，1920，30年代の真空管や電気音響からはじまり，1950，60年代に黄金期（グレイトフル・デイズ，栄光の日々）を迎え，1980，90代のいま哀退しつつあるということだ．（中略）

いま，オーディオ雑誌に記事を書いている評論家やライターの人たちは基本的にHi-Fiステレオの人たちである．アナログ，真空管，トランジスタ，テープ，ディスク，モータ，放送，電波の人たちである．しかし，彼らはもはや現代のオーディオについて語る資格はない．たとえば，MPEGについて，Hi-FiがホンモノでMPEGはニセモノ，といったことをいってしまうのは，Hi-FiにせよMPEGにせよ，よくわかっていないのである．

マニアや評論家は「別にMPEGなんぞわからんでも，デジタルやマイコンやソフトウェアやネットワークに関する知識なんかなくても，オーディオについて語れる」というかもしれない．たしかにそうかもしれない．しかしそれは，電気音響が登場した時に，アナログや真空管やモータやラジオ（電磁波）に関する知識がなくてもオーディオについて語れるといった人（いたかどうかはしらないが）と同じである．結局，Hi-Fi，ステレオのマニアは，Hi-Fi，ステレオ村の住人であり，Hi-Fi，ステレオ島の住人であり，Hi-Fi，ステレオ星の住人なのである．

電気音響というものが，1920，30年代には先端だったものが，50，60年代には時代の寵児となり，そして’80，’90年代にはもはやオーディオ全体のテクノロジーの進歩からはとり残されつつあるということだ．Hi-Fi，ステレオは聴感や使いこなしが必要である．それはローテクだからだ．新幹線があるのに，わざわざ汗だくになって蒸気機関車を走らせる．それが文化なのだ，という．そして，蒸気機関車がエンコしてもまあしかたないと思うが，新幹線が故障すれば，技術神話が崩壊したなどといわれる．つまり，新幹線は，水や空気みたいになっているわけだ．

高城重躬氏が亡くなったことは，明治生まれゆえに「明治は遠くなりにけり」といいたいところだが，実際は「戦後は遠くなりにけり」「昭和は遠くなりにけり」といった感じがする．

定電流アンプ試聴会に出席

一同絶讃，製作には二の足（？）

細野　道夫

愛知県の岡崎市で，定電流アンプの試聴会があるというので，聴きに行ったのですが，音はどれもいままでに聴いたことのないようなすばらしいもので，早速報告します．

最近本誌上で電流アンプの話題がよく出てきますが，まだその音は聴いたことがありませんでした．話でいくら聞かされても，音だけはそのものを聴いてみなければわかりませんから，チャンスとばかり行きました．電流アンプの試聴会等というものは今回が初めてだそうです．

その感想は一口にいってしまうと，従来の音とは相当に異質なものであることです．少なくとも“豪快な音を求めてまっしぐら”という人たちには，そう簡単に理解してもらえるとは思われませんが，逆にいろいろやってみて，どうしても飽きたらないという人たちにとっては大きく関心をもたれるのではないか，という感じです．今回来た人は30人あまりで，はた目ではどうやら遠くからお金を掛けてまでも聴こうと来ている人たちがほとんどのようで，絶賛派のように見受けられました．

会の運営は，司会がうまくて，短時間にセットの組み合わせ，曲目の切り替えをどんどん進められ，つぎつぎ出て来るいかなるリクエストにもすべて応じるので，ギャラリーはもちろんのこと，器械を持ち込んだ側にも欲求不満がまったくなく全員満足のようで，後の会食時はたいへんでした．

よく説明者が，いつまでも自分の好きな曲をブンチャン，ブンチャン掛けて自分だけいい気持ちになって会場が白らけてしまうことがありますが，今回は見事で，わかれば次という具合で，１曲の演奏時間の短いこと，ギャラリ

ーがきびしく実演なみの音量を求めること等，すこぶる印象的でした．

出された器械の紹介を次にします．

●EL34 超 3 アンプ（宇多氏製作）

製作者のいわれるように，強力な低音と鮮明な中高音が出るので，狐に摘まれたような思いです．それでいてトランスは小さいものです．かなりくわしい説明資料が渡されましたが，よくわかりません．確かに耳で聴いてそうなのですが，ほんとうに額面どおりならば，球アンプの革命です．これは後日もっとくわしく別途解説していただきたいものと思っています．

●12AU7／4 パラ PP（島田氏製作）

すでに『オーディオアクセサリー』誌上で詳細な解説がなされているものですが，ご本人が腕によりをかけて改善に改善を重ねて，自信を持っておられるものです．球の世界は猫も杓子も 300B といわれる中で，能率のよいフルレンジを使えばこんなによく鳴ると，ご自慢の P-610 ダブルの密閉箱とコンビでの参加です．

●電流アンプ「石塚・実用型」（大沢氏製作）

今日の本命で，ラ技（'99年 9 月号）に作り方が発表されたモデルです．今回の発表会ではほとんどはこちらが使われて，絶賛を博しました．もちろん 3 種類のスピーカはすべて相性をテストしました．

20個づけでは 1 つ 1 つのコーンにかかる負荷が少ないためではないかという説明でしたが，いかにもひずみの少ないようなさわやかな音がするだけでなく，そんなに大きな音を出していないのに，ホールの後ろの方にまでよく届きました．P-610 1 個のフェルト箱の場合は，10kg の重りの効果はたいへんなもので，音の透明度のよいこと，アタックのはっきりしていることは抜群です．一番出し難いピアノはもちろんのこと，そのほか歌，ヴァイオリン・ソナタでたいへんよく鳴りました．

このアンプを真似して作りたいという人は，潜在顕在を含め何人もいたようですが，大沢さんの「難しいぞ」というおどかしと，ラ技に載っている電流アンプのいままでの記事をよく読むこと，今回雑誌に発表したものよりもう少しくわしい回路図，構成部品表等を渡され，次回はもう少し中身に踏み込んだ会を持つらしいことで，引き下がられたようです．

●電流アンプ「石塚・究極型」（大沢氏製作）

大沢さんは回路的にも実際の音でもこれが最高と推奨されており，今回はさらに最近話題になっている大春さん推奨の音のいいコンデンサも使用しているので，非常によくなっている，といわれるのですが，最後の 5 時直前で全員疲れきっており，さすがにいい音はしていたものの，耳が参ってしまい，感動が今一つという感じ．もっと早い時間にやって欲しかった，と今になって残念至極です．

●定電流アダプタ（石松氏製作）

ラ技の12月号に発表されたものを，大沢氏が今回の発表会のため借用を要請して願いが叶った由．これを使って，ビクターから出て話題になっている「鬼太鼓座」を20個付きのスピーカで鳴らしたところ，実に見事なもの．全員ぶったまげてしまいました．

●245PP アンプ「チョーク給電型」（三島氏製作）

ナス型の 245 を 4 本使用した見事なもので，どのスピーカを鳴らしてもはっきりしていて柔らかで実によい．PP のトランスの中点から給電するのにチョーク・コイルを使っているとのことでした．

●200W　Tr アンプ（牧原氏製作）

音は Tr アンプとしては完成された感じ．大出力は音を正確に出すための手段とのこと．モノーラル構成の箱 2 つで，石は 2SC3281 と 2SA1302 の 5 パラ，トランスは 3 個だそうです．

●120W　Tr アンプ（竹内氏製作）

自宅ではこれと同じモデルがあと 2 台あって，それで 755A を 4 個（左右 2 個づつ）鳴らされているとのこと．

●フェルト箱 P-610×1 個（杉沼氏製作）

今回の催しため新たに作られたもので，大きさは A2 版，奥行きは極力薄く 20cm，スピーカに 10kg 弱の重りを付けられるようフレームができているのだそうです．

●フェルト箱　無銘 6 半×20個（杉沼氏製作）

すでにラ技には発表ずみのものだそうですが，今回分解組立てができるように改良したとのこと．ダブルウーファの倍くらいの放射抵抗があるものと，解説がありました．

●密閉箱 P-610×2 個（島田氏製作）

これは前述のアンプとペアのもの．幅が狭く奥行きが深く，両側の角が落とされていてスマートなものでした．



●会場に並べられたスピーカ・システム

度もこのビデオは小堀氏宅で見ているのですが，その時には気がつかなかった微妙な画像と音のすれ違いが，明らかにわかってしまうのです．WRアンプの再生した直後に聴いてみますと，まったく落ち着かないのです．音を聴けば映像が邪魔になるし，映像に目をむけると，今度は音が鼻に付いてしまうのです．意外にもA社のアンプは自己主張が強く，WRアンプの持つナチュラルな再生が際だったのでした．それに対してWRアンプでは，映像と音が一体化して，意識しなくとも音楽に浸ることができるのです．WRアンプの持つ自然な再生音がこのような組み合わせで鮮明に現われたようです．

オーディオはどこへ行くのか

ハイ・デフィニション・オーディオ研究会に出席して

丹野　哲男

第1回のHDA（ハイ・デフィニション・オーディオ）研究会がつくばの電総研，視聴覚室で開かれた．目的は，高品位オーディオの発展を図るために，何をすればよいのかということ．以下に，内容を簡単にまとめてみた．

吉川昭吉郎氏が初めに会の目的を話し，テーマとして高品位オーディオの現状，今後の取り組み方などを挙げた．

吉川氏の話では，ハイ・サンプリング，ハイ・ビットの規格がさまざまあり，普及の妨げになるのではないかとの心配がある．そのせいか，一般の人の間に拡がらず，コンテンツがあまり出てこない．特にクラシックがほとんどないのはどうしたわけか．LPからCDに移った時のわくわくする感じや，優秀録音が次々と出てきた興奮が感じられない．ほんとうに新しいフォーマットに優位性があるとするならば，最高のアナログ音源と比較をして優劣を論じるべきと思うが，その動きもないのは嘆かわしい．

一方，現在元気な話題はMP-3などの圧縮規格やパソコンのサウンド・カードなどで，若者はこれに夢中である．これは高品位ではないが，聴き流すタイプの音楽を聴くのに意外とよい．アカデミックなアプローチが足りないようだが，コストや技術の複雑さにより，大学の手に負えない対象になったからのようだ，といったテーマが取り上げられた．

大学関係の参加者からは，大学の研究サイクルに合わないほど時間がかかるからでは，とか，難しすぎるからでは，との意見があった．

発表が3件あったが，その第1番は，NHKの沢口氏による「マルチチャネル音声制作の現場について」．

映画ではサラウンド方式が採用され，家庭でもホーム・シアター用にドルビーなど広がり始めた．

制作現場では，前方3，後方2の5つのモニタ・スピーカを使って調整しているが，定位の問題など，調整方法に確立したものがない．また3—2（前3，後ろ2スピーカ）サラウンドを普及させるには多くの問題がある．

普及は徐々にやるべきで，急ぎすぎないのがよいと思う．過去の4チャネルの愚を繰り返さないことが大事．世界中でも，まともなサラウンド制作のエンジニアが20人ほどしかいないので，あまり売れ過ぎても困るとのこと．

次が富士通研の大賀氏，「最近のオーディオ技術に関する標準化の話」．

関連団体と規格，デジタル技術の標準化を概説．標準化と測定技術は一対のものである．スピーカ測定用の密閉箱ですらきちんと決まっていない現状を改善して行かねばならない．電話の評価法にはある感覚と測定器との関連式が，オーディオではまだないのが問題．標準化の話は非常に大事であるが，これに取り組む人は少ないようだ，という．

最後に電総研の蘆原氏．「ハイ・サンプリングのメリットとデメリット」．

超音波領域まで再生する場合の問題点．録音時にもノイズが入りやすく，聴こえない音の品質管理をどうするのか，現にDVD音源に音楽ではない20から30kHzあたりのノイズが連続して混入しているものがある．現在まで超音波が入っていることを聴き分けた人間はいない（聴こえる人がいたら，被験者として欲しいとのこと．）のに，音楽となると超音波が必要という人がいるのはどういうことだろう．ただし，スピーカがひずんで可聴音域にノイズが出ることがあるのは確かだが，超音波を聴いているわけではない…….

その後，日本でも最大級の無響室，反響室，マイクの校正室の見学と，超音波試聴実験，スペクトラムを観測しながらのDVDオーディオの試聴などのデモがあって，参加者は大いに満足した．全体の印象は，参加者にも発表者にもレベルの高いバランスの取れた人が多く，たいへん知的興奮を覚えるものであった．

見学後に懇親会を行い，旧交を温めたり，意見を大いに交換して，7時過ぎに散会となった．次回は2月中に東京で開催される予定．

現在のトレンドは，デジタル技術を使ったそこそこの音質レベルのものを，いかに便利にするかという方向である．このトレンドを変えていく志はすばらしいが，道は険しそうである．地味ではあるが，標準化や音質の官能試験と測定可能な試験との関連づけを見つけていただければと思う．会の中で，時間軸方向の評価をすべきであるとか，記憶が音質評価に影響しているのではという意見が出たが，賛成である．この辺が開発されれば，オーディオ界にはびこるオカルトを退治できるのではと思った（中にはCDでのジッタのように，オカルトではなかったというものも現われるのではという期待も込めて）．